

岩久正明教授退官によせて



退官にあたって

う蝕学分野教授 岩久正明

1962年東京医科歯科大学歯学部を卒業後、母校の歯科保存学教室（後に歯科保存学第一講座となる）に入局し、国家試験（当時は4月に行われていた）の合格発表と共に5月16日、文部教官・助手に任官し、恩師総山孝雄教授の下で20年に亘ってご薫陶を戴いた。本来、社会歯科学に興味を持ち、学生時代も僻地歯科事情の調査・診療を試みる学生組織（診療内容もあり、多くの教官の方々のご援助を戴いた）「紫茗会」の創立にも参画し、当時日本のチベットといわれた岩手県の僻地の活動に毎夏参加しており、卒業後は予防歯科・口腔衛生関係の講座で勉強したいと考えていた。

しかしながら、卒業前年に希望講座の教授が退官され、講座の性格が基礎研究に変わったため希望が断られた。同郷の恩師である総山教授にご相談したところ、教授も社会歯科学の重要性を強く認識されておられ、保存学教室でもそれらの努力はできる、と大変有り難いご好意を戴き、入局を許された。「社会歯科学の活動をするにしても、十分な研究実績と研究者としての信頼がなければ誰も耳を傾けてくれないので、基礎となる研究をきちんとしなければいけない。」とのご忠告を戴き、その後、20年にわたり、う蝕治療の修復体である材料、被修復体である歯質・歯髄（後に、Dentin-Pulp Complex）、1次・2次う蝕発生の予防、学童の口腔疾患の疫学的調査等の研究に携わってきた。

その間、毎年夏休みには「紫茗会」活動にも教官として参加し、また、1965年には、日本政府派遣南西諸島歯科診療班の責任者として、3ヶ月間

沖縄（当時はまだ、USCA・米国国民政府の統治下であり、通貨はドルであった。）の離島に滞在し、診療・調査活動に携わった。厚生省の指示で、実情視察に来島された総山教授はその実情をご覧になり、大学における社会歯科学的研究・教育分野の早急な拡大・充実の必要性を痛感され、その後直ちに大学および文部省に、複数の社会歯科学系講座の新設を具申されたが、時はまだ黎明に至っていなかったのは残念の極みである。

母校に文部教官として在籍のまま、1967年からデンマーク王立歯科大学に講師として奉職し、その後、客員研究員として米国インディアナ大学に滞在する機会を得て、修復材料の研究の傍ら、ヨーロッパや米国の多くの大学を見学する機会に恵まれた。特に、北欧諸国では、大学と共に一般の福祉制度を学ぶ機会を得たことは、私の人生にとって大きな財産となった。スエーデンとノルウェーの大学で知ったカリオロジーの講座の活動は、日本で見ていた講座制とはかなり性格を異にして、永年探しつづけたものにめぐり合った感じで、大変興奮した。それが、私のカリオロジーウイルス感染の機会だった。特に、オスロー大学を訪れた時、カリオロジー講座では会議中だった。メンバーは、講座のスタッフ、自治体職員、歯科医師会代表、一般代表等で、国民の口腔疾患の実態と緊急度、国の歯科医療予算、治療担当者のパースンパワー等をもとに、今なにをなすべきかの施策の検討がなされていた。第二次大戦の影響もあって、当時厳しい経済状態の中で、若年者の疾患予防活動が第一次選択とされ、その活動が展開され

ていった。当時の日本では、隣国の戦争などによる奇跡的な経済復興の中で、う蝕治療は大人も子供も、治療しては再発を繰り返し、早晚、歯の喪失に至る日本的歯科保険医療制度が政府の肝いりで進められていた。また、米国でう蝕の原因菌が発見され、まもなく文明病としてのう蝕も根絶されるだろうと言われながら、我国のう蝕罹患率はなんと恥ずかしい状態を続けていた。

そんな中で、基礎的な分野では、その病因の研究に取り組んで、発症のリスクを早期に発見してその発症の予防を目指し、病態の研究では、生活習慣以外の要素でも不幸にして発症する症例について早期に発見してその病態を的確に把握して、生体侵襲を最小限に抑える生物学的な治療法を確立することを目指し、そして、臨床の分野では、近代的手法による発症リスクの診断、口腔ケアのみならず、生活指導、病態の診断、経過観察、要処置の症例では病巣無菌化組織修復療法、最小限の生体侵襲、組織親和性の優れた材料、再発予防のための接着性・組織強化性材料の応用等を目指し、自然科学としての歯科医学研究をもとに、それらをいかに国民全体に効果的に展開するかを社会科学的な方法論の検討までを網羅した、新しい発想の「カリオロジーの講座」の確立を求めてきた。

1977年、IADR で訪れたデンマークのコペンハ

ーゲンでばったり星野先生にお会いした。先生は、東京医科歯科大学の解剖学教室で文部教官をお勤めの途中から、東北大学の生化学教室に移られ、そこからスエーデンの大学に研究に来られていた。色々とお話するうちに、先生も北欧のカリオロジーウイルスに感染されておられたようで、二人で将来是非日本で、日本のカリオロジーを始めようと熱っぽく語り合った。1982年私が新潟に赴任し、続いて1984年星野教授が東北大学から赴任され、これぞ神の啓示と感謝し、小沢教授や野田教授にご協力戴き、日本で初めて新潟大学に「カリオロジーグループ」の研究組織が誕生した。その後、大勢の仲間達に支えられて「嫌気性菌とカリオロジー」シリーズを始めとして、分子生物学、細胞生物学、免疫組織化学的手法等をもとに多くの研究が進められ、それらのエビデンスにより新しいクリニカルカリオロジーが確立されつつあり、最終講義でお話させて戴いたように、「新潟より21世紀の世界に発信」できる研究や臨床技法が蓄積されつつある。

これからの新潟大学の新進気鋭の諸君が、大いに世界に翔いて下さることを信じて疑いません。20年と5ヶ月の間、研究、教育、臨床にとお力添え下さり、且つ又我儘をお許し下さった皆様に心より感謝申し上げます。長い間本当に有難うございました。



岩久教授の退官によせて

歯学部長 花田 晃 治

岩久正明教授が平成15年3月31日をもって定年退官されるにあたり、新潟大学、新潟大学歯学部および歯学部附属病院に対する長年にわたる教育、研究、臨床におけるご貢献に敬意を表するとともに深く感謝の念をささげます。大学時代の先輩に対してこのような立場でお礼申し上げることをお許しください。

岩久正明先生は、昭和57年11月1日に細田裕康教授の後任として東京医科歯科大学歯学部から新潟大学歯学部第一保存学講座教授に就任されました。私が昭和44年に新潟へ参りました時には、先輩である細田教授がすでに赴任されており、そして細田教授が東京医科歯科大学へ転出された後に岩久先輩が赴任してこられたのですから、私としては恐れ多いことの連続でした。

ところが岩久教授は、私が歯学部附属病院長を務めさせていただいたときには、全面的に応援するので思う存分やってくださいと仰っていただき常に正確な情報に基づいて的確なご意見を次々といただき安心して管理運営を行うことができました。また、歯学部長の時にもご理解、ご協力により何度も救っていただいたことがございます。

岩久教授は、教育の面では、常に日本における先端的な手法を開発してこられました。特に代表的なものが、保存実習におけるシミュレーション・システムの全面的な導入という点では日本における第一人者を務めてこられました。これにより実習は系統的に行われ、実習の能率が向上するとともに、実習評価が客観的になされるようになっております。このシステムは、卒前教育はもちろんのこと、卒後教育においても活用されており、さらには他大学の学生および研修生にも開放されております。

また、新潟大学附属歯科技工士学校長を二期務められ、パラデンタルスタッフの養成にも深く関わってこられました。

岩久教授による研究面における最大のご功績はCariology という学問体系の確立であります。この視点は基礎的研究および臨床的研究においても十分に生かされており、さらには、この思想は学生教育にも活用され学生の、この分野での理解の向上に大いに役立っています。

こうした教育、研究、臨床における輝かしいご業績に基づいて、北海道大学歯学部、広島大学歯学部、新潟大学医学部・教養部、歯学部附属歯科技工士学校の講師として教育に貢献されました。また、新潟大学教育学部附属小・中学校および養護学校の学校歯科医としても活躍されました。

さらには、新潟大学および歯学部における数々の委員会委員などを務めてこられました。

対外的には、日本歯科保存学会、日本歯科審美学会および日本歯科人間ドック学会の会長として、また日本歯科医学会評議員会議長として、この分野をリードし世界に学術情報を発信してこられました。さらには、学術会議研究連絡委員会委員、医療関係者審議会専門委員、学術審議会専門委員、歯科医師国家試験委員、新潟県在宅寝たきり者等歯科医療事業検討委員などの大役も努めてこられました。

国際的には、多くの学会および大学と共同研究を推進される一方で、多くの外国人留学生の教育に情熱を注がれ、彼らの多くは彼の地において指導的立場を占めながら活躍しています。

こうした長年にわたるご活躍に対して敬意を表し深くお礼申し上げますとともに、今後のますますのご活躍をお祈り申し上げます。



岩久正明教授の御退官によせて

新潟大学歯学部附属病院長 河野 正 司

岩久先生、長い間新潟大学のためにお働き下さいましてありがとうございました。

先生は新潟大学歯学部歯科保存学第一講座の第二代教授として昭和57年11月に赴任され、それ以来22年の長きに亘り保存修復学ならびに歯内療法学を担当され、教育、研究に大きなお働きをなされ、また歯学部附属病院第一保存科（現：歯の診療室）の科長として本院の発展に大きな足跡を残されました。さらにまた、新潟大学歯学部附属歯科技工士学校校長として4年間に亘り、歯科医療を支えるパラデンタルスタッフの教育の先頭に立ってご活躍くださいました。これまでの新潟大学歯学部及び歯学部附属病院におけるご活動に、重ねて御礼を申し上げます。

岩久先生は学問の世界で常に時代の先頭を走られ、世界の接着性保存修復法および病巣無菌化組織修復療法の研究リーダーとしてご活躍され、これらのご業績に対して日本歯科保存学会賞を受賞されましたことは、歯学部附属病院としての誇りでもございます。先生はこれらのご研究をすぐに臨床の場への応用に努められ、齲蝕治療の最新術式として本学歯学部附属病院に来院される患者さん方に適用していただき、本院の名を大いに高めてくださいましたことは、われわれ後輩にとりまして大きな支えとなっております。

先生は私にとりましては東京医科歯科大学歯学部以来の大先輩でいらっしゃいまして、学生時代から40年にわたるご指導を頂戴しております。私が新入生として市川・国府台の教養1年の時には、折からの60年安保時代の歯学部自治会長としての岩久先生に、その流暢な弁舌のさわやかさに、羨望のまなざしで新入生の一人として初めて接することができました。高校を卒業したての教養1年生には世の中の改革に純粋な情熱を注がれる先輩の演説に感激しことも、岩久先生とのお交わりにおいては忘れることのできない思い出であります。その時代の多感な青春の経験が、現在の私の存在にとっての原体験として、大きな位置を占めていると感じております。

今日は社会のあらゆる面において改革が求められ、大学においても学部改革や附属病院の改革が遡上にあります。しかし、本学部の附属病院は先生の構築された病院の体系を基に、さらに大きく展開していくことができると確信しております。

定年は大学の定めではありますが、先生には今後とも歯学界の将来のために英知をお貸しいただけますようお願いいたします。ますますご健勝にて、一層のご指導ご鞭撻をお願いしてやみません。

岩久正明教授 最終講義を終えて

う蝕学分野 子 田 晃 一

岩久正明教授の最終講義が、平成15年1月29日午後2時35分より、歯学部講堂において行われました。最終講義については新潟大学歯学部歯科保存学第一教室同門会を母体とする岩久正明教授ご退官記念事業実行委員会が中心となって企画し、学内外の皆様のご後援を得て盛会裡に開催できましたことに対し厚く御礼申し上げます。当日はがくせいのみならず、当講座の初代教授の細田裕康名誉教授はじめ学内外より多数の参加者にお出でいただきました。最終講義には当講座の担当する3年生の今年度最後の時間を当てましたため、3年生以外の学生他皆様にはややご参加いただくには困難な時間設定になりましたことについては深くお詫びいたします。

「新潟より世界に発信 二十一世紀のカリオロジー」と題する最終講義は現在の歯科界が置かれている状況から始まり、今後の歯科界が進むべき方向、今後の展望について岩久先生がご指導されたう蝕学分野の研究を引きながら熱く語っていただきました。そして最後に新潟から世界に向かって広く羽ばたくよう学生ならびに教室員を激励され、聴講者全員が深く感銘を受けました。その後、学生、う蝕学分野教室員、以前教室の事務を執っていた池津さんからの花束贈呈がありました。また、この最終講義は鈴木一郎先生にご協力いただき、インターネットで同時中継を行い、文字通り新潟より世界に発信という事になりました。このコンテンツは歯学部のホームページに置

いてありますので是非ご覧いただきたいと存じます。

最終講義後、歯学部食堂において「岩久先生を囲む会」を開催しましたところ歯学部関係者、学生諸君など多数の皆様の参加をいただき楽しい会になりました。会を始めるにあたり、花田学部長にご祝辞をいただき、細田名誉教授のご発声による乾杯で開宴となりました。岩久教授を中心にいろいろな思いで話に予定していた時間も瞬く間に過ぎてしまいました。囲む会終了後、医局に場を移し二次会は更に続いたという噂もありました。

岩久正明教授ご退官記念事業会では、さらに岩久正明教授退官記念講演会をホテルオークラ新潟において平成15年3月29日14時～16時に開催するべく準備しております。内容は岩久正明教授ご本人による「健康科学としての歯科審美 ーおいしく食べ、楽しく話す心豊かな長寿のためにー」です。一般の方々にも無料で公開いたしますのでお知り合いの方を広くお誘いいただきご参加いただけますようご案内申し上げます。

岩久正明教授ご退官記念事業会では、さらに岩久正明教授退官記念講演会をホテルオークラ新潟において開催するべく準備しております。内容は岩久正明教授ご本人による「健康科学としての歯科審美 ーおいしく食べ、楽しく話す心豊かな長寿のためにー」です。こちらも盛会になるよう実行委員会一同祈っております。

